玖島（大村）城跡と旧武家屋敷

本会幹事　陸門良輔

大村氏の始祖藤原直澄は、天慶の乱で破れた藤原純友の孫といわれるが、後に朝廷より赦され、正暦４年(９９４)彼杵・高来・藤津の３郡を賜り、大村に土着、以後、大村を姓としたといわれる。

大村氏は、肥前国の中小豪族の一つであるが、周辺には西郷氏、松浦氏、龍造寺氏、さらには島津氏や大友氏など有力な豪族が割拠、大村氏はそれらの勢力に絶えずおびやかされていた。現に１６代純伊は、有馬貴純に破れ、領外に遁れたが、その後、旧領を奪還することができた。そこで１７代純前は、兼ねてより姻戚関係にあった有馬氏より純忠を養子に迎えた。

１８代を相続した純忠は、大村氏をさらに強大な戦国大名にするため、ポルトガル貿易に着目、永禄５年(１５６２)には横瀬浦(現西海市横瀬郷)を開港、さらに翌年には受洗、わが国最初のキリシタン大名となった。

純忠の子喜前は、関ヶ原の戦いで東軍についたので、本領安堵、ここに２万７千石の大村藩が誕生し、喜前は初代藩主となった。しかし、幕府の禁教令が厳しくなる中、喜前は加藤清正の忠告をいれ、日蓮宗に改宗したといわれる。

慶長４年（１５９９）喜前は、それまでの居城三城城に代わる城を大村湾に面した玖島崎に築いた。武家屋敷は、旧久原城近くのなだらかな丘陵地に小姓小路、本小路、上小路、草場小路の４か所があり、武家屋敷街と城を守るために、海側に外浦小路を造った。

上小路武家屋敷跡

小路の武家屋敷は、今でも江戸時代後期の姿を留め、当時の様子がうかがえる。県の有形文化財に指定されている楠本正隆屋敷跡は、一般に公開されており、一見の価値は十分である。

周辺には、一般の住宅になっているので見学はできないが、江戸時代そのままの屋敷が４～５軒残っている。また、旧円融寺庭園（国指定名勝）や五色塀なども素晴らしい。

玖島城板敷櫓

大村氏系図

…１６代純伊 —１７代純前 —１８代純忠
—（初代藩主）喜前 —（２代藩主）純頼

玖島城は、玖島崎に築かれた平山城で、本丸、二の丸、三の丸からなる。

本丸は、高さ１５ｍで、２，８６１坪のほぼ四角形の敷地は石垣に囲まれている。西に虎口門、南に台所門、北に搦め手門の３つの虎口を備えているが、幕府に遠慮したのか天守は建築されなかった。

二の丸は、９，０５１坪で石垣は無く、中央に大規模な空堀が設けられていた。

三の丸は、半島先端の２３，９２１坪の広大な平地で、御船蔵や船関連の役所が置かれていた。

海城の特徴として、堀の水は海水を利用している。また、北側の浅瀬を伝わって来る敵兵の侵略を阻止するため、海中に捨堀が築かれていたが、現在は埋め立てられている。

城は、喜前の子純頼によって拡張、改修がなされた。大手門を南に移し、その周辺は「打ち込み接ぎ」と呼ばれる工法で石の角や面を加工し、高く反り返る美しい扇の勾配を有する石垣に造り替えた。この時、喜前と親しかった加藤清正に設計指導を受けたとされる。

明治４年（１８７１）玖島城は廃城となり、主要な建物は破却された。

本稿は令和５年８月例会の発表の要旨である。

参考文献

大村市史編纂委員会『大村市史』大村市　昭和４９年
『大村市の文化財』大村市教育委員会　平成７年
大村史談会編『大村史話　上』大村史談会　昭和４８年